

## 令和6年度第2回大槌町総合教育会議議事録

### 1 日時

令和6年10月29日(火)午後2時～午後4時

### 2 場所

大槌町役場3階 大会議室

### 3 出席者

≪大槌町総合教育会議 委員≫

町長 平野公三

副町長 菊池学

教育長 松橋文明

教育委員 大萱生都

教育委員 谷藤怜美

教育委員 東梅広美

教育委員 芳賀新

≪大槌町総合教育会議 アドバイザー≫

東京学芸大学名誉教授 尚絅学院大学特任教授 小池敏英

NPO 法人カタリバオンライン事業部長 瀬川知孝

≪地方教育行政における連携推進事業委託者≫

文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課 地方教育行政係長 帆玉光輝

文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課 地方教育行政係専門職 松田大輝

#### [事務局]

参事兼総務課長 藤原淳

健康福祉課長 小國晃也

学務課長 吉田智

総務課主幹 岩間純子

総務課課長補佐 祝田潤昌

健康福祉課 子ども家庭センター総括支援員 元持翠

学務課 統括教育専門官 菅野祐太

学務課大槌型教育推進係上席係長 関谷辰也

学務課大槌型教育推進係指導主事 金子裕輔

学務課大槌型教育推進係指導主事 照井善博

学務課大槌型教育推進係スクールソーシャルワーカー 南景元

学務課大槌型教育推進係教育相談員 大森厚志

学務課 魅力化推進員 小野寺綾

## 【議事詳細】

- 1 開会(藤原総務課長)
- 2 挨拶(平野町長)  
※挨拶内容は省略
- 3 協議(進行:平野町長)
  - ①大槌町教育大綱素案について
  - ②「けやき共育」の進捗状況について

### ≪説明≫

#### ①大槌町教育大綱素案について(菅野総括教育専門官)

前回、第1回総合教育会議にて、この教育大綱を策定していく流れについて、皆様にご確認いただきました。今回は、素案を皆様にご提示しながら、ご意見をいただきたいと思っております。

教育大綱の取り組みについて、6月26日に町立の大槌学園、吉里吉里学園の、教員の方々に集まっていたいで、熟議を行いました。

この中で、大槌町の教育の良いところという話になった時に、やはりふるさと愛、郷土愛が育まれており、地域との繋がりをすごく感じられるということをお話する教員の方々がすごく多かったです。課題としては、本当に子どもたちの主体性が育っているのかという意見がありました。あとは、確かな学力が本当に身についているのだろうかという話も、教員の方々から上がっておりました。また、8月19日ですね、社会教育団体、子ども支援団体と熟議を行いました。この中でも、子どもたちが地域に出て活動している様子というのが、すごく見受けられるとお話をいただきました。しかし、もう少し、外にもっと発信をしていいのではないかと意見もありました。その後、福島県大熊町から南郷園長・校長に来ていただいて、教育未来会議を行いました。詳しいA3の資料で、イラストが手書きで書かれているものがありますので、こちらで説明させていただきます。

まず、町長から、地域づくりと教育は非常に密接に関連しており、これからも地域の皆様と対話しながらやっていきたいというお話をいただいたところからスタートしました。

その中で、児童生徒のトークセッションの時間をもちまして、ここで大槌の教育の良いところを、子どもたちから話してもらいました。自然を生かしたふるさと科の話や、郷土芸能の話が出てきました。また、これからの大槌の教育への期待として、他学年、学校ともっと交流をしていきたい、生徒の意見をもう少し聞いてほしいという、率直な子どもたちの声もありました。地域での学びに関する生徒発表のところでは、高校生からふるさと科を、もっと主体的に関わるようなものにできないだろうかという声がありました。吉里吉里学園からは、仮説検証型の探究的な学びに取り組んでいるということをお話していただいて、主体的に子どもたちも関わろうとしていることが、非常に感じられる発表でした。

また、左下に、南郷校長・園長からお話いただいたことを掲載させていただきました。幼・保・小・中、義務教育まで、繋がっているというような学校なので、遊びを大切にしつつ、全員が主体的にマイプロジェクトを持っているような学校作りが大事なのではないかというようなことを話していただきました。

一方、南郷校長から率直にお話いただいたのは、大槌の教育はもうすでに外に発信できるだけの力

があるのではないかと、だからしっかり外に発信していくということをやっていくべきなのではないかというお話も同時にいただきました。

ワークショップの中では、大槌のこれからの教育はどうあるべきかを、皆さんに考えていただきました。子どもの居場所作りや、地域と一緒にコミュニケーションを取ってほしいというような意見がありました。教員、社会教育、子ども関係者、地域住民の皆さんと熟議を行い、広く声を集めた上で今回素案を策定させていただきました。

A3の概要図と書いてある、素案をご覧ください。

前回この骨格が策定されたのは平成30年ということでだいぶ時間が経っており、今回改めて策定したいと思います。しかし、町の教育の変わらないところということをしっかり見据えておくということも非常に重要であると考えております。子どもの学び基本条例と平成27年に策定した大槌町教育大綱については、やはりこの不易の部分としてしっかり持っておきたいと思っています。大綱の理念のところでは、学びがふるさとを育て、ふるさとが学びを育てるまち大槌ということで、ふるさと自体が、学ぶ人を支えていこう、そういう循環があるまちづくりをしていこうということで、この大綱の理念が策定されました。そこで、自立、協働、創造という、大槌町として育成すべき人ということをここで掲げられ、これを元に子どもの学び基本条例につながっていくということになります。大槌の教育の目標の1、2、3番は、その時に教育大綱を策定するときに話された内容です。

また、4番の防災に関することを理念として入れて、大槌の教育の不易の部分になります。この大槌の不易の部分と、さらに、県で策定している教育振興計画、国で策定している教育振興基本計画ってことを参酌しながらこの素案を作っています。

大槌の教育の現在地と未来について整理をしてみました。教育委員会定例会でも話題にありましたが、子どもたちの数が減少しているのは事実であり、2020年から、今回2050年を1つのターゲットにしており、63%減少していく見込みです。この時に、教育はどのようなことをしていくべきかを考える必要があります。また、2050年に必要な力、生成AIだったりするような技術が出てくる中で必要な力も変わってきています。

右側の、この学力の定着というところも、教員からもお話が上がっていましたが、これも課題としてはあると考えています。また、多様化する子どもたちの価値観ということで、まさに今日の後半部の議論にもつながるかもしれませんが、価値観が多様化して、不登校の子たちが増えてきている現状もあります。

最後に、住民同士のつながりの希薄化ですが、コロナを契機に、この繋がりが希薄化しているという現状もあります。ただ、一方で、右側の教育の種です。これから大槌が考えていくべき時にこういう新しい動きが出てくると思います。それは、例えば0歳から18歳までということ掲げて、県立高校と連携した教育を行い、はま留学も安定軌道に乗り始めている状況もあり、学ぶ場として選ばれる大槌町になりつつあります。

また、地域活動も公民館を活性化していくような地域活動が生まれてきたりもしています。また、探究的な学びによる子どもたちの変化というところですが、学園のふるさと科や、マイプロジェクトを通して主体性が向上している姿であったり、多様な居場所の生まれる大槌ということで、民間機関が子どもの居

場所を作ってください。また、郷土芸能についても、地域内外の繋がりが生まれてきているという教育の種があります。それを基に考え、今回、2050年の大槌をつくる教育をともにつくるという方針案をつくりました。これは、まず2050年の大槌ということ、1つ掲げております。今、小学校に入学前の子たちが2050年には30歳ぐらいに差し掛かるぐらいの時期になります。そうすると、大槌をまさに支えていく生産年齢人口になります。2050年にその子たちが大槌にこれからも住みたいと思ってくれるようになるには、教育で何ができるかを皆様と一緒に考えたいと思い、この2050年の大槌をつくる教育ということ、掲げています。つくるという言葉は、みんなで作っていくのだと、前向きに、今はないものかもしれないけれども、みんなで作っていくのだというそういうことを表現させていただきました。8つの基本方針については、全て述語を「つくる」でまとめております。

①番から⑧番まで、紹介させていただきます。

まず①番は、これからの大槌をつくる、新しい学びをつくるということで、今、学び方もだんだんと変わってきています。個別最適な学びと協働的な学びを通じて確かな学力をつくっていきましょうということ。また、探究活動、ふるさと科もありますけれども、この主体性のある探究活動、どの世代でも、子どもたちだけではなく、地域住民も一緒になって、探究的な活動をしていきましょうということです。

②番は、前回大綱と引き続き、0歳から18歳までの一貫した魅力的な教育をつくるとしています。大槌高校では、魅力化構想をつくっておりますが、大槌学園、吉里吉里学園においても、それぞれ学校が中心となって魅力化構想をつくりましょうということです。また、幼保小の、架け橋をつくっていくことも非常に重要なのではないかと思います。

③番は、地域とともに学び合う学校ということで、これも前回大綱で、引き続きコミュニティ・スクール、地域学校協働活動ということを進めていきましょうということです。

④番は、誰もが安心して学ぶことのできる大槌の教育をつくるということで、0歳から18歳までの居場所作り、また、特別な支援を要する子どもへの、個に応じた自己実現の支援や不登校児童生徒、保護者への寄り添った支援ということを引き続き、けやき共育を推進していくことを方針として掲げています。

⑤番は、大槌の教育をさらに魅力的なものにしていくと、大槌に住みたいとかですね、一時点で例えば幼保のところだけ大槌に住みたいという方も出てくるかもしれません。そのような学びに行きたくなる大槌の教育を作り、さらにそれを発信していくということが必要なのではないかなと思ひまして、この⑤番を挙げております。

⑥番は、教員の皆さんが大槌に来て働きたいと思える環境作りが重要ではないかと。やりがい、働きがいのある職場で、視察や研修の機会が充実していて、どんどん学んでいこうと思える環境作りが必要ではないかと考えております。

⑦番は、特に社会教育のところになりますけれども、世代を超えた繋がりある地域をつくるということで、公民館、芸術文化、読書、スポーツの充実や、姉妹都市、郷土芸能、文化財のことに関しても機会の充実を図っていくことを掲げています。

⑧番は、命を守る防災学習の在り方ということで、これは条例にも教育目標として書いてありますが、引き続き学校教育だけではなく地域においても進めていくというような方針を示すべきなのではないか

ということで、この基本方針 8 つを掲げています。教育大綱の素案は以上となります。

《質疑応答》

【大萱生教育委員】

今説明のある通り、この資料もすぐまとまっていて、ただ、私なりの、ちょっとせっかくなので意見や考えを述べさせていただきます。多様化する子どもたちの価値観を育てるためというところでの AI 等の情報技術を身につける力もすぐ今後必要とは思いますが、子ども家庭センターも開所しましたし、また、子育て支援センターもすぐお母さんたちの 憩いの場になっています。妊婦さんからのケアも手厚く今始まっていますので、子ども家庭センターの役割、助産師さんの役割はすごく大きいなと思っています。そして、お母さん方がリラックスして心地よく過ごせる場所、居場所も今後も定期的に開催していただければなと思います。あと、多様化する子どもたちの変化について、地域の方々からも色々と、不登校のこととか話もされていますので、今後共有する場とか、地域住民、地域の方々にも、子どもたちを見守っていただけると、学園における教育活動もすぐ、ますます高まりが出てくるのではないのかなと思っています。あと、これからの大槌をつくる、新しい学びをつくるとのことですが、町内の学園が、大槌学園と吉里吉里学園、小学部、中学部 2 校あり、地域内での入学になりますが、今後は小規模の吉里吉里を望む声もあるのではないかと。私の知り合いの子どもさんで、人数が多いとやはりちょっと抵抗がある子どもさんもありますし、やはり今後は町内でもその辺の調整といえますか、保護者と子どもの意見を聞きながら検討していきたいと思っています。

最後に、保育園留学が今、全国的に少しずつ広まっております。少子化もありますので、保育園の定員割れも出てくると思いますので、そのところも検討していきながら交流人口も増やしていただければなと思います。大槌学園におきましても、子どもたちが吉里吉里学園のように放課後の学習をもう少し、大槌高校のコラボスクールの学園型を考えていただきながら、地域の方のボランティアにも入っていただきながら、学習の仕方と、細かく低学年からも希望者には見ていただくことによって学習の定着が良くなるのではないのかなと思われるので。今後はけやき共育に関してもまた継続しながら、ここに位置付けていただけて、進めていただければと思います。

(平野町長)

健康福祉課の関係と教育委員会の関係で課長。

→(小國健康福祉課長)

今年度、子ども家庭センターが設置されたということで、社会福祉士 2 名と、助産師 1 名、保健師 1 名の専任職員 4 名体制で取り組んでいるところです。半年経過しましたが、教育委員会をはじめ、関係機関との連携は一定程度できており、まず問題なく現状では進んでいると認識しています。

現在、その通り少子化が進んでおり、今 40 人前後の出生数ですが、そういった中で、今後、保育施設が 6 つありますので、定員割れ等について、今後、園さんと一緒に考えていかなければならないと思っています。その他に、国の方からも様々に異次元の少子化対策が示されていますので、そ

れらを見ながら、計画を今年度見直していますので、そういった部分を踏まえながら今後皆さんの意見をいただきながら進めていければと考えています。

(平野町長)

あと、地域を超えた入学について話しいいですか？

→(吉田学務課長)

その子にあった、例えば少人数が良ければ吉里吉里学園に入学したいという特認校も含めて、検討しているところです。吉里吉里は将来的に特色ある学びができる学園を目指そうという素案を教育長も持っておりますので、これから詰めていきたいと思っています。

【谷藤教育委員】

たくさん私たちの意見、他の方も意見もそうですが、酌んでいただいて、非常に素晴らしいものになってい

ると思います。素晴らしすぎて、特にこう訂正するようないところがない状態ですけれども。

今、菅野さんのお話聞かしまして、基本方針の2番の0歳から18歳まで一貫した魅力的な教育をつくるというところ。なんて言うのですか、今、私も大槌学園のPTAでして、ただ、PTAが全然機能してないというのを普段から思っています。大槌高校魅力化構想会議のような会議体が大槌学園・吉里吉里学園に、もしできるのであれば、PTAをもっと巻き込んでいく、強いては地域を巻き込んでいくということに繋がっていくかと思っておりますので、それはぜひ進めていただきたいという風に感じました。あとですね、こういった素晴らしいものを、毎度同じことを言いますが、広報する力が大槌町はとても弱いと思っておりますので、地域の方を巻き込めるように、広報にも十分力を入れていっていただきたいという風に思っています。

【東梅教育委員】

私も話したいこと、谷藤委員さんの方からは話されたのですが、基本方針3の「地域とともに」というところは、我々親もしっかりがんばって、PTAもしっかり頑張っていかなければならないのではないかなという風に思いました。今、家庭の方が支えられて、こんなに熱い思いで町の方も頑張る、各部局も頑張る、教育側もしっかりやるという風な内容がしっかり出ています。やはり1番は家庭の愛情だったり保護者の思いだったりすると思うので、そういうPTAのところも入れてほしいなと感じます。

【芳賀教育委員】

非常に立派な大綱が出来上がっているなと思います。

自分の方から、今のこれからの基本方針1の個別最適な学びと協働的な学びと、基本方針6の教育関係者が働き続けたい環境をつくるはイコールでなければならぬと思います。子どもたちは素直だし、吸収します。カリキュラムが変わろうが指導方針変わろうが、ついて来る力は非常に持っていると思います。ただ、そこに対する教員の方が追いつくことができない状況もあり、今非常に変革期だと自分

は思っています。教員の熟議の中で、本当に主体性が育っているかがクエスチョンというのは本当に率直な意見だったと思います。そういう風に悩ませないように、我々、地域もそうですけども、やっていかなければと思います。それに伴って基本方針2の幼保小の連携も大事であると思います。どうしても親も未熟なもので先生に頼りたい、学校に頼りたい、保育園に頼りたい中で、そのスタートが幼保だと思えます。幼保小の連携まだできていないような気がしていますので、そこを充実してもらえればと。例えば子どもが悩んだ時に、親と学校と一緒に子どもと向き合えるようにしてほしいと思います。

一方で子どもの主体性が出てきた部分もあって、この前、吉里吉里学園中学部の生徒会の選挙演説の中で、ただ単に自分の学校見に来てくださいだけではなくて、自分たちが地域に下りていこうということを生徒が話していた。そのようなところはきちんと評価をして褒めてあげる。褒めて伸ばすような教育の方がよいのではないかなと思いました。以上です。

(平野町長)

教育委員4名の方々から意見等いただきました。学務課長からお答え願います。

→(吉田学務課長)

来年度から、各学園の魅力化に力を入れていかなければならないなと思っておりました。

大槌高校さんがいい成功例とと思っていますので、成功例に学びながら、何らかのサポートをして学園で作っていく必要があると感じております。その時に、一緒に、PTAと地域と共に魅力的な学園作り着手していきたいと思っています。保護者の思いを大事にしながら、子どもの思いを大事にしながら、一緒になって作っていくところを大事にやっていきたいと思っています。

次に、教員の指導の部分の件です。子どもたちが主体的に学ばなければならないってことは、教員はもっと主体的に行かなければならないのではないかと考えています。教員が子どもたちの鏡であると思うので、先生方がそういう姿勢を見せるというところが、子どもたちを育てる第一歩になるのではないかと考えていますので、町長もどんどん研修の機会、あとは先進地に行って学んでくるような、そういう機会を作るようにということをおっしゃってくださっていますので、ぜひそういう予算も確保しながら、先生方が本当にこれから自分たちのスキルをアップできるような、研修をしていきたいと思っています。

最後に、子どもたちの活動っていうところで、大槌高校が、だいぶ地域と一体になって活動しています。今年度延べ1000人ぐらいになりそうだということです。もちろん小中学生も行っているわけですが、そういった形で、お兄さん、お姉さん方を手本に、小中学生がどんどん地域に出て行って、地域の方から認めてもらうと、本当によくやっているねとか、こういうところが良かったよねとか、芳賀委員がおっしゃった通り褒めて伸ばしていくっていうところ、大切にしていかなければと考えております。

(平野町長)

その他、幼保小連携のところでは、

→(金子指導主事)

これまで、幼保小連携のところでは、互見保育という形で、小学校の先生が幼稚園の授業、保育

を見に行ったり、それから保育の先生方が小学校の授業を見たりという形で今年度も実施しています。ただ、どうしてもそれが形式的になっているところも反省としてありました。今年度、10月に第1回架け橋プラン開発会議を開きまして、来年度どんなことができそうかということ、各6園の園長先生と学園長先生方から意見をもらっているところです。11月、12月には、具体的にまずできそうなことはどんなことかを詰めていき、来年度からは具体的に実施できればなどと思っています。ただ授業を見るだけではなく、実際に小学校の先生が園に半日行ってみて保育を体験するとか、そういった案も出ておりますので、大槌に合ったものをこれから実施して作成していきたいと思っています。

《説明》

## ②「けやき共育」の進捗状況について(吉田学務課長)

2枚目をご覧ください。大槌型特別ニーズ教育の体制ということで、これは、昨年度最初に作ったものです。児童生徒が真ん中におります。その周りに学校、保護者、家庭があります。あとは幼稚園、こども園、保育園、そして関係機関で教育委員会ということですが、左側に町役場、大槌町は、教育委員会だけではなく町長部局が一緒になってやっています。そして、誰一人取り残さない学びの保障、教育大綱を実現することを目指しています。

本日の説明内容ですが、けやき共育の進捗状況が①番、令和6年度けやき共育の取組状況ということで、各研修会の実施状況、あとはけやき共育の運営について。②番、町長部局との連携、こども家庭センターとの連携の様子を説明します。③番目、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実にかかる先進校視察について。④番、児童生徒の状況、⑤番は3月までの推進計画ということで説明させていただきます。

(金子指導主事)

取組状況のうち、各研修会の実施について説明します。

今年度行ったもの5つ挙げました。捲っていただいて、具体のところ写真付きで載せています。

まず1つ目です。特別支援担当者研修会を4月10日に行いました。4月最初に行うことで、今年度の教育のところにもまず自信を持ち、それから少し安心感を持って取り組んでほしいという狙いで行ったものです。特別支援学級の担任の先生、それから幼稚園、保育園、こども園の保育教員も対象に行いました。内容としては、特別支援教育エリアコーディネーターの先生に講義、個別の支援が必要な児童、幼児への支援のあり方について演習を行いました。初めて特別支援学級の先生、担任をした先生もおり、具体的な支援のあり方について学ぶことができたということがアンケート感想からもありました。

続いて行ったもの、4月26日になります。特別支援員研修会です。各学園に配置している支援員さん、担任のサポート的な役割で学級に入っております、を対象にしています。こちらについても、幼・保・こども園の方にも周知し、参加をいただきました。講師には佐藤駿一先生に来ていただきまして、主な障害の特性の理解と支援についてというところを講演いただき、そして学校、学級での支援について、参



加した先生方でどんなところ困っていますかというような形で協議を行ったところになります。成果と課題になりますけれども、専門的な知見による講義が大変有意義であったという感想、とても具体的などころを示していただいて、環境を整えるということがすごく大事であることと、叱る時は親戚の子どもを預かった時ぐらいの気持ちで叱るなど、具体的などころも示していただいたのが効果的だったなと思います。

続いて、4月30日、事例検討会を行いました。1学期の指導をそれぞれの学園を通して、さらに改善が必要なら、また教員の困り感を基に行う事例検討会でございます。助言には佐藤駿一先生にオンラインでございましたが参加していただきました。専門的な視点からの助言がありがたかったというご意見もありました。実際、今回、それぞれの指導に対する事例を、各学園から持ってきてもらい、こういった時にどうしたらいいですかね。こういうところ困っているというような話をしていたわけですが、反省としては若干時間が足りなかったかな、もう少し深められればよかったなということもありましたので、来年度以降検討が必要かなと思っています。

続いて、ペアレントティーチャーズ・トレーニングを実施いたしました。これは真ん中辺りに書いてありますが、NPO法人手話サプリの理事長の細川さん、それから心理士の樋渡さんに来ていただいて、支援機関で取り組んでいる子どもへの療育について、計4回、研修を通して学び、実践に活かしていくというようなものです。今回、保護者向け、それから先生向けという風な形で開催しました。まずティーチャーズの方で、先生向けで行いました。行動の捉え方、褒め方のコツ、こういったところの研修を通して学ぶことができましたし、必ず宿題が出るので、実際に対象とする子どもに対してどういう風に支援してきましたか、どういう風に見取りましたか？そういったところを基に第2回に進んでいくという風な形でやってきました。そういったところがすごく先生方にも好評でした。ただ、今回の反省としては、保護者にも呼びかけましたが、各園を通して、平日の日中に参加できる方がなく、今回実施できませんでした。参加しやすい日程等検討し、また来年度以降のところで改善が必要かなと思うところです。

続いては、けやき共育の専門チームの活用というところです。こちらも、教育委員会だけではなく、各関係機関と連携し、様々なところで対応していることを報告します。相談チーム、特別支援教育チーム、就学支援チーム、情報の共有がスムーズに行われているのが、大槌町のこの専門チームの良さであるなと感じています。

(南スクールソーシャルワーカー)

続きまして、けやき共育、昨年度から始めまして2年目になりました。けやき共育で、子どもを育むということで、3つに大きく力を入れてきたのかなと思っています。

学びと子どもの心と子どもの体。生活というところで一緒に育んできたなと思っています。これまでこの半年間、大森教育相談員と藤社支援員が軸になって色々運営してきました。その中で、けやき共育とともに育ててきた方々の紹介をさせていただきたいと思っています。

まず、学びを育むというところで、今年から学習ボランティアとして退職された先生方にボランティアとして活動いただきました。毎週火曜日と木曜日、「まさみじいちゃんの英語教室」、「平野じいちゃんの数学教室」で、子どもたちと一緒に学びを育んでいます。今、一緒に勉強している子たちは、16歳から

のけやき教室で参加している高校生の通信制の課題を一緒に見ていただいています。

今年も大槌町のふるさと科を活用した体験学習を推進してきました。その中で、まず1回目、吉里吉里国の方で藤岡さんを招いて、ピザ作りの体験をしました。2回目は、小林清さんを招いて、吉里吉里国でのツリークライミングやったところですよ。あと、今年砂金取りの体験をしました。金沢の阿部さんと小田島さんが軸になって講師になってもらい、一緒に砂金取りについて学習をした時間となります。一緒に砂金取りをしている1番上の方。1番楽しんでいるように見えていますが、指導主事の照井先生も一緒に参加して、大人も楽しめるような学習を推進できたのが、この体験学習の1番いいところだったのではないかと思います。

あと、心を育てるという意味で、グロッセ龍太さんを招いて、自己表現の枠を年5回計画で今やっています。これまで2回行ってきました。バランスボールを使って自分を表現しながら、リラックスした時間を一緒に過ごすことができます。終わった後には、このようにカードを並べて、その中で自分がどういう感想を持っているかを話し合ったり、ここにはちょっと写真は載ってないですが、親子で参加して、一緒に1つの作業を共有するような場面もあったり、ワークとして継続しています。

あと、地域おこし協力隊のマイさんが先生に講師になって、マイさんの美術教室も月2、3回ほど行っております。これまで、木工であったりとか、美術であったりとか、絵であったりとか、いろんな事を表現しながら、活動しながら自分を表現するような活動を行っております。

先月からは、作業療法士の資格をお持ちの保護者さんが講師になって、運動遊びクラブを開催することになりました。月に1回ほどこれからやっていく中で、運動として自分を表現する中で社会的なルールをどのように学ぶかというところをみんなで育てていきたいなと思っています。

それと、隔週水曜日の朝7時から、7時40分まで、OLAIを拠点に朝のこども食堂を実施しています。

月あかりの会、今日参加されている大萱生委員さんもそうですが、皆さん手弁当で毎朝いらして、このような朝の食事を提供していただいております。ちなみに明日も開催する予定なので、もしよければいらしていただければと思います。家庭の事情によりなかなか朝食が用意できないなという家庭もあり、朝食が食べられないお子さんがかなりいらっしゃるの、朝のこども食堂はすごく有意義であると実感しています。

あと、保護者と一緒に成長していくという意味で、保護者会も毎学期1回ずつ行っています。1学期は、焚き火を囲んでみんなで楽しむという会を行いました。これはスイカ割りをしている様子ですが、ここでも親子で一緒に参加して、ちょっと一時を過ごすというようなことができました。このように、この半年間、けやき共育に色々な方が参加してくださり、けやきルームであったり、自己表現の枠であったり、あと、今日参加しておりませんが、佐藤先生の相談会にも希望して参加するご家庭が8家庭ほどありました。こういうところで成果が出ているなと思っています。このようなけやき共育を教育委員会で頑張っていますが、やはりこれを育てていくには、地域の方々の協力なしでは育てていけないと実感しています。

(元持こども家庭センター総括支援員)

続きまして、福祉部局と教育部局の連携状況について、説明します。

今日お話しさせていただきますのが2点になります。未就学児に関する連携について、大槌町要保護児童対策協議会、通称要対協と申しますが、こちらの連携の状況についてお話しさせていただきます。

未就学児に関する連携についてですが、就学前に、3月頃に次年度の年中、年長時の情報共有を健康福祉課と教育委員会で共有の場を設けています。乳幼児検診や相談会の中で、発達が気になるお子さんとして健康福祉課の方で支援しているお子さんの情報について共有をしています。その際に、年長児に関しては、教育相談へ繋げるところについても事前に教育委員会と相談をし、次年度スムーズに相談へつなげられるように準備をしています。年度が始まり5月から7月頃には、当センターと教育委員会が合同で各園を巡回訪問しています。特に支援が必要なお子さんについては、教育相談員のつなぎについて園も交えて相談をしています。その後、教育相談への繋ぎ方についても、それぞれのご家庭に合わせ、福祉課から繋いだ方がいいか、園から繋いだ方がいいかなど、保護者の方がスムーズに相談ができるように、教育委員会と連携しながら対応しています。

就学先が決まってからですが、2月から3月頃には、就学前には就学時サポート会議というものを開催しています。保護者の方が安心して入学を迎えるということが目的です。会場は、就学先の学校で、保護者、園、小学校と教育委員会と、児童発達支援事業所なども使っているお子さんでしたら、そちらの事業所さん、そして、こども家庭センターとあとは、放課後に使う学童クラブの方などもお呼びし、就学前に、サポート会議を開催しています。そこでは、入学までに少し準備、何が必要かということの確認もしますし、入学後に向けた保護者さんの願いの確認など、園や児童発達支援事業所で行っていた支援方法の引き継ぎなども丁寧に1人ずつ、行っています。こちらの会議につきましては、サポートファイルポケットと言います。冊子ポケットという資料を使っての会議をしています。補足で、このサポートファイルポケットの概要について説明します。こちらは母子手帳の延長のようなもので、成長の記録として保護者さんに活用していただいているものです。こちらは、特別な支援が必要なお子さんについて、障害児の福祉サービスを使う際に、保護者さんにお配りしているものになります。中身についてはちょっと後でご覧いただければと思いますが、妊娠中のから発達の過程など細かく記載することができるようになっていきます。進学やその先の就職、あとは病院に受診するなどの支援のつなぎの場面でこれを活用していただくためものです。こちらの資料の最後の方に、就学時のサポート会議、サポートプランがあります。ケース会議の時にプランを作成し、登下校時、学習時間、休み時間、給食のところでどういう課題が想定されて、どのような対応を学校で行った方がいいかというのを所属している園と今後所属する学園と一緒に考えている状況です。

次に、医療的ケア児の就学に向けた連携についても始まっています。医療的ケアが必要なお子さんの情報については、早めに、年少までの頃には教育委員会に情報共有させていただいて、就学に向けて準備を行っている状況です。

続きまして、要保護児童対策協議会の方での連携について説明します。子どもを守るネットワークの機能です。この協議会では、虐待等で養育環境に心配がある家庭についての対策を検討し、子どもに関わる機関で連携しながら日頃の見守りなどを行っているところです。子どもたちが所属している機関や教育委員会との連携が特に重要となっています。大槌町での特徴としては、教育委員会との連携が密で

あることが言えるかと思います。物理的に近いということもありますが、顔を合わせながら情報共有を日々行っておりますので、連携の強化につながっています。平常時でももちろんですが、その連携が、緊急対応、虐待通告などの場面でも連携がスムーズに行われて、見守りや情報共有が図れていると感じています。日頃の予防の部分も同様です。支援者の定例会を月に1度、児童相談所も含めた会議を開催しています。ここでは、長欠児童や気になるお子さんの情報共有も図られて、こども家庭センターからは、虐待を受けたお子さんのご家庭や支援が必要なご家庭、そして妊婦さんについての情報も共有しています。この会議の中で、学園の働きかけや専門職チームの関わりなども含めて、具体的に支援方法を検討しています。そのおかげで、虐待の早期発見や予防に繋がっていると感じています。

けやきチームが、家庭や学園、生徒さんと近い立場で関わっていて、また、福祉、医療の専門職チーム、学校や家庭との調整を図ってくれており、繋ぎ役を担ってくれているため、支援の受け入れもスムーズにしてくれていると感じています。

最後に、ここまでお伝えしましたように、連携が図れているということで、児童、家庭への支援が早期に開始されて、活発な支援系統でより効果的な支援が図れるようになってきていると感じています。今後も、就学前から教育部局、福祉部局と連携しながら、切れ目のない支援を続けていきたいと思っています。

(金子指導主事)

続きまして、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実にかかる先進校視察について報告します。

7月4日、5日の2日間で、天童市中部小学校、それから福島大熊町立学び舎ゆめの森学園を視察してきました。参加者はそこに書いてある通りです。学園の先生方にもそれぞれ参加していただき、特に良かったと思っています。

天童市立中部小学校についてです。こちらについては、個別最適な学び、協働的な学びというところで書籍が出版されています。当日は授業参観のみでしたが、自学自習というもの、それからマイプラン学習というものを見学しました。こういったものを取り入れて学校運営をしている。もちろん、いわゆる通常の学級での指導もしつつ、2割ぐらいはこういった自学自習、マイプラン学習っていうものを取り入れている。自学自習は教師がいない中で教師役も子どもがやって進めていく。マイプランは、児童が計画し進めていく。例えば、15時間の单元の中で、外国語と理科の7時間をどう組み入れるかを自分で決めて、行っていく流れになっています。

その日の様子です。写真が1番わかりやすいかなとは思いますが、マイプラン学習单元内の自由進度学習になります。自分の意思、判断によって、自らの学びについて学習を組み立て、計画し、進める学び。ということで、実際に見てきた様子は、教室だけではなく、近くの空き教室も使いながら、自分が学習したい場所選びを進めていました。タブレットで動画を見たり、問題を解いたりですね。右側の写真の子は、ローマ字の問題について、タブレットを使って取り組んでいく学び方をしています。これらがどのようにやっていくかという、廊下に学習シートが用意されていて、まず自分が進んでいる部分のプリントを取って、学習し終わったらそれぞれ丸付けをして、次のように進んでいく流れになります。進め方の表が

左の写真のように貼り出されているという風な形です。その様子ですけれども、次の写真のところでは、黒板に学習プリントの回答があり、各自答え合わせを行ったり、先生方もそのそれぞれ教室を歩いているので、必要に応じて声をかけたり質問があり、児童は先生に声をかけたりして、そこで個々の指導をしていくと。児童も計画表を使って、その振り返りを書き、ポートフォリオとしてまとめていくというような形でした。

児童のもう1つの学習も参観してきました。自学自習です。自分たちだけで学ぶことができるということ、狙いとしては、有能感、満足感を児童が味わうようにしたいということを取り入れているとのこと。この日は道徳の様子でした。本当に子どもが学習シートをもとに発問して、それを答えて黒板に書くという風な形で進めている様子でした。

続いて大熊町の学び舎ゆめの森です。先日、教育未来会議にも来ていただいた南郷先生がいる学校です。まず、もう写真で分かるように、ここが学校かなと思うような造りでした。こども園と義務教育校を一体化し、経営する学校となっています。校舎の中を歩いていると、それぞれのところで学習している。いわゆる教室で常にやっているというよりは、子どもが学習する場所を選びながら、学習するところに移動してやっているというような形です。スライドにある写真は、算数の学習です。それぞれの頻度に応じて進めています。左側、写真には写っていませんが、見えないところに担任の先生がいて、できたところまで持って行って見てもらったりしている様子でした。壁に貼ってある表につけている磁石は、自分が今ここまで進んでいることが分かるように貼ってあり、他の人が見てもわかるようにしていると。それから、自分が次どこに進んでいくのがわかるようにしているという工夫でした。

また、レベルアップタイムというのを毎日25分、取り入れており、その時間は本当に自分の好きな学習を好きな場所で行って行っていました。写真の子は、すごくこのおしゃれな空間のところで、国語のテストをやっていました。こういったところも工夫されていると感じましたし、また、金曜日には時間割も自分で決めているそうです。子どもたちがその時間割もタブレットで入力すると、校務システムと繋がっており、先生の方でも、国語は何時間しているか、算数が足りないなどということもわかるようになっています。そういう場合には、ちょっと次は算数も入れてみたら。なんてことも先生から声がかけるということでした。

研修を通して感じたこと、学んだこと、今後に向けてです。

1番はやはり、その場に行ってそれを見たこと、そして感じたことが大きかったなと思います。本でも見ることはできますけれども、その良さの部分と、なんとなくこちらのイメージが先行してしまいがちですが、そこで実際を見たことが大きかったなと思います。

教育課程の工夫とか、また子ども主体の学びを作り上げていきたいという教員の思いがすごく強いなっていうことを1番に感じました。そういった話し合い、実践の積み重ねによって、価値あるものが作られているのだなというのを実感したところです。これを今後、大槌町でどのように学びを教育に生かしていくかと考えた時に、やはりこの多様な学習形態、手段ですので、やはり合う場面と合わない場面があると思います。それから、その地域によるものもあると思います。長短というところをしっかりと理解し、その上で大槌の子どもたちに主体的な学びを実現していくにはどのようにしたらいいか、そういった視点で考えていく必要が大事ではないかと思っています。形だけ持ってきても、なかなかの実現というのは

難しいのだろうと思っています。実際に大槌学園での公開等も今後予定されていますので、そういったところで関わりながら、新たな学習の形態も取り入れ、そして現場の先生方が実際に行いながら、こういうこともいいのだからというのを分かった上で発展させていけるとよりいいのではないかなと思っています。

(照井指導主事)

児童生徒の状況について、2点説明します。

1点目は、第1回の大槌町学習・生活アンケート児童生徒の結果について。

2点目は、不登校児童生徒の推移と支援状況について。なお、不登校児童生徒は年間30日以上長期欠席となっております。

まず初めに、アンケート結果についてです。調査目的ですが、大槌町が推進している大槌型教育の推進状況について、アンケートに基づいて評価、検証して成果や課題を明確にすることで、大槌町の子どもの豊かな育ちと確かな学びの実現に寄与できるようにすることとなっています。調査期間今年度は7月に第1回を行いました。調査対象は書いてある通りです。

検証の視点ですが、けやき教育が新規の不登校児童生徒未然に防ぐ手立て、ウェルビーイングとして有効に働いているかどうかという点。あとは見方ですが、経年のデータを基に強い肯定的回答の割合で評価、検証をしております。検証のための項目は書いてある5点となります。1つ1つ見ていきます。

項目の1 自分には良いところがありますか。自己受容についてとなります。この棒グラフは学年ごとの結果で、右側に行きまして、青い表が積極肯定の昨年度からの推移で、緑の表が、これは参考になりますが、令和6年度の全国学調の同じ質問の積極肯定回答の結果となっています。全体の3割超えの児童生徒が積極的に肯定回答し、令和6年の第1回には4割近い数値となっています。児童生徒1人1人を認め、励ます支援や働きかけの成果が現れているのかなと考えられます。今後さらに、自己の良さを実感できる機会、活躍できる機会の意図的な設定、個々の児童生徒の良さを認め、伝えることのできる対話は、場面の設定等ができれば最良であると考えられます。

次に項目の2 学校に行くのは楽しいと思いますか。主観的幸福感についてです。

令和5年の第2回で落ち込みは見られましたが、令和6年の第1回では非常に高い数値となっています。これまでの教職員の諸活動の工夫、尽力により、多くの児童生徒が学校への登校に対しての前向きな印象を持っているのかなという風に見て取れます。ただ、否定的回答した児童生徒に対して、学校への登校に対する前向きな印象形成を促す、これだけではなくて、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーによる、全員面談等も実施しておりますので、それらや個別の相談機会の設定、これらを通して本人の意向に沿った学習等の場や機会の提供に向けた支援を行うことも重要であると考えます。

次に、項目の3 いじめはどんなことがあってもいけないことだと思いますか。

これについて、全体の8割超えの児童生徒は積極的に肯定回答しています。多くの児童生徒が他者の権利と尊厳を守ろうという認識を有している点が示されています。今回の調査では9割近い数字となっています。また、今年度9月末までの町内両学園でのいじめ認知件数、4件という風に報告されています。少数と考えられますが、上記認識に基づいた児童生徒の望ましい行動が実践されている点が

推察されるところです。

続きまして、項目の4 自分が悩んでいることがあった時、誰に相談することが多いですか。多様な繋がりについてで、こちら複数回答可となっています。令和5年度から6年度までの推移がグラフで示されています。家族及び家庭の回答割合は多いものとなっていますが、先生の回答割合もかなり高い結果となっています。日常の教職員と児童生徒との友好的な人間関係や教職員の存在が、学校における児童生徒の心理的安全性の基盤となっていることが推察されます。2重丸で書いていますが、令和6年度の第1回では、項目によらず回答の割合自体が増加していることがわかると思います。一人で悩まない、困ったことがあったら誰かに相談するといった意識の高まりと、相談先選択肢が増えていたことが推察されます。これまで、教職員や保護者、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーからの働きかけの成果がここにも現れているのかなと見て取れます。ただ、いないと回答した児童生徒もやはり一定数いますので、引き続き、身近な支援者が相談先になりうるとともに、相談電話やオンライン等の相談先がありますので、それらについての情報共有も引き続き行っていくことが重要であると考えられます。

項目の5 間違えることを気にせずに授業に取り組んでいますか。挑戦と周囲のウェルビーイングについてです。こちら表を見ていただくと、令和6年第1回の数値が低く現れていることが見て取れます。これについてですが、令和5年までは5教科それぞれの質問項目でした。数学はとか、国語はとか、教科ごとだったのですが、令和6年度実施する時に、授業全般における児童生徒の内面的な振り返り、これが必要ではないかということで、教科によらない質問として実施しました。教科ごとに見ると、例えばあの先生、間違えると怖いとか、そもそも発表の機会がほとんどない授業や、様々な要素を含んでしまうことが考えられましたので、そのように実施したところでは、

数値が大幅に減少したのは、教科ごとに異なっていたそのような間違いのシチュエーションが抽象的になることで、純粋に間違えることへの本人の怖さや不安のようなものが表出したのではないかと考えられます。これについては、間違えることで学びが深まるといった体験をさせることや、間違っても大丈夫という安心感を持たせる声かけは工夫が大切だと考えられます。これらの結果については、各学園別で校長会議でも話題にさせていただき、今後の方向性などを共有しているところです。

次に、不登校児童生徒の推移と支援状況についてです。

令和5年度、令和元年から、数字が増え続けていまして、令和5年度は震災以降最大の人数となっています。令和6年は9月現在の数値となっています。このページは学年ごとの推移となっています。令和5年度は9年生13名の不登校生徒がいました。通信制高校に進学し、16歳からのけやき教室を利用している生徒もいます。義務教育終わると、なかなか目が届かない状況がありますが、このような関わりを持つことで、今まで目が届かなかったところに目が届くようになり、大槌が掲げている0歳から18歳ってところの1つの形としてここにも現れているのかなという風を感じています。

次に、月ごとの推移となっております。9月までを比較すると、昨年度よりも残念ながら今年度高い数値で推移しています。ただ、現在の30日以下の生徒児童を見てみると、昨年度より低い数値になっていますので、今年度の終わりのところでは、昨年度よりも低い数値で落ち着くのではないかなという風に見えています。吹き出しに書いておりましたが、昨年度の3月、42名中29名が1年生から8年生の児童

生徒、つまりは今年度の在學生ということになっていますので、この29名についてちょっと触れさせていただきます。

29名中24名については9月時点で30日を超えており、長欠になっていますが、5名の児童生徒、回復傾向として見えています。例えば、Aの生徒、昨年度39日でしたが、今年度6日となっており、状況としては、スクールソーシャルワーカーと健康福祉課が定期的な本人及び家庭への支援を行っていました。そういう中で、本人への自力登校の力がついて、家庭の方も落ち着いてきているという状況です。

Dの生徒、5年生ですが、昨年度105日休んでいましたが、今年度8日と、かなり欠席日数減っています。この児童・生徒に関しましては、担任、学園長による継続的な登校支援、個別の学習支援を行っていました。という風な活動の中で回復することができた児童となっています。

次のページは、昨年度、長欠不登校児童生徒ではありませんでしたが、今年度新規で不登校となった児童生徒です。令和5年度の欠席日数、見ていただくとわかるのですが、昨年度も、30日には満たないのですが、10何日、20何日と休んでいた児童生徒です。状況の要因のところ、見ていただくとわかるのですが、かなりこう要因が多岐に渡っている。生活リズムの不調や不安、あとは、学校生活に対してやる気が出ない等々、要因が挙げられています。一人ひとり要因、理由が異なっていますので、個に応じた支援が絶対必要になってきています。それらの支援を今後もチームで行っていきたいと感じているところです。

最後に、不登校児童生徒への支援状況、延べ人数です。今年度9月時点で26名、不登校児童生徒、名前が上がってきています。人数ですが、学団担任が関わるのは当然ですが、それ以外でも、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、教育相談員、養護教諭等、様々な角度からの支援を現在も実施しています。そして、26名の支援だけでは当然なくて、未然に防ぐ取り組みとして、先ほども言いましたが、全員面談やケース会議等々、けやきチームが積極的に各学園に関わり、連携を図っていますし、今後もそれは続けていきたいと考えています。

では、けやき共育の推進の最後、⑤3月までの推進計画について簡単に説明します。11月には、先ほどあったアンケートの第2回、教員対象のものと児童生徒対象のものを行う予定です。1月には、大槌町の教育推進協議会は、特別ニーズ教育研修ということで、東京学芸大学の視察に行く予定です。2月には、第3回の総合教育会議まとめの機会となっています。そして、3月には、大槌町教育大綱公示というような推進計画になっています。

《質疑応答》

【谷藤教育委員】

研修会についてなどは、本当に細かにやっていただいて、もう心強く思っています。

けやき共育の生徒の方ですけれども、ふるさと科なんか非常に好評ですし、それに基づいたような形と言いますか、課外授業、非常に楽しそうだなと好意的に見ております。ここからはちょっと保護者の立場になりますが、保護者となると、もし子どもが不登校になった場合、ちょっと内申点の方が気になってきてしまっていて。こういった課外授業が内申点にプラスされていくのかどうか。また、もしそうであれば



ば、こういった事業をたくさん実施していただけたらなって、もちろん人的なものとか足りないものたくさんあるとは思いますが、希望・欲が出てしまうなっていう風に思っていました。

(平野町長)

システム的な所をお答えできますか。

→(吉田学務課長)

もちろんこの日は出席扱いになります。あとは、総合的な学習というところでの評価には繋がると考えています。その他に、大森相談員が中心に学習支援もしていますので、当然、その学習支援の評価というのは、内申点に影響するということになります。しっかりサポート体制が整っていると感じています。

【東梅教育委員】

すぐく情報を共有しながら取り組まれているということと、とても熱い支援になっているなと思いました。それで、就学時サポート会議のところですが、これはすごくとてもいい取り組みだなと思いますので、ぜひこれからも続けていっていただきたいと思います。私の方から少し質問がありますけれども、今支援が必要なお子様も増えていると。町にはどのくらい人数なのか、そこも話せるところで構わないので教えていただきたいのと、あと、やはり、保育所、幼稚園となった場合、サポートするその保育士の数が足りているのかということをお聞きしたいと思います。

(平野町長)

健康福祉課長の方から。

→(小國健康福祉課長)

障害児の部分ですが、今 15 名のお子さんが、各保育施設の方に入所しています。その町内の 6 つの保育施設の方に入所しており、保育所の方には、町の方から、補助金を出して運営の手助けをしている形になっています。あと、保育士充足の部分ですが、現時点では保育士は充足している状況で、イコール待機児童は出ていない状況です。

【芳賀教育委員】

私もこの先進地視察に行ってきた 1 人として、感想を含めちょっと話したいと思います。先ほどの話、やはり個別最適な学びを今後進めていく上で、自分も非常に衝撃を受けてきました。あれは元々被災にあってないところに最初から建物から計画を立てて作ったものなので、今の教育に合った建物になっていました。こども園から小・中に。ただ、今これを大槌に、そのまま持ってくるのは不可能だと思いますけれども、そういったところをどのように考えているのかと。あと、今後進めていく中で、やはり先ほども言った教員の研修をもっともってほしいなと思います。町の方で予算化をしていただいて、やはり先生たちが理解していかなければならないと考えた時に、これだけのことするに先生たち大変だろうなって思って聞いたところ、ほとんど残業ない、働き方改革の 1 つでもあるし、行事前後の残業があるくらいで、

ほぼ残業なしでできていると。では、子どもたちと向き合う、でもそれでも思いつきできているし、じゃあ好き勝手遊んでいるような子どもにも一瞬見えた場面もあったのです、学力低下もしていないと。きちんとしたカリキュラムの中で、多分、今までの教育は、授業して、ついていけなくなって、そこからついていけなくなった子どもに合わせて勉強を教えていただいていたのですが、これからはスタート時点からその子に合わせたスピードで進めていくようになるのです。今、少子化進んできていますので、案外この方が子どもたちに合っているのかな。それに、先生方の指導っていうのが非常に大事になってくるし、我々大人も、今までの学校のイメージを180度変えなければならないと思っても来ましたので、そのあたりは、地域の方にももっとこういう風なところを発信して、今、大槌町の教育はここを目指している、こういう教育をしていくという所の理解を保護者だけではなくて地域の皆さんにも発信していかないと。もっともっと、先ほど話があった通り、大槌町ってどうしても発信能力が弱い。非常にいいことをしていますので。大槌高校もそうですけども、非常にいいことをしているのですが、見えてこない。見えてこない間に5年、6年経過していますので、やはり今評価をしてあげたい子どもたちにはきちんと評価をしてあげた方がいいと思うので、発信してほしいなと思いました。もう1回でも2回でもあの学校に行っ色々学びたいなどは自分は思っていましたので、機会がありましたら声をかけていただければと思います。

(平野町長)

今のご質問やご意見について、学務課長。

→(吉田学務課長)

本当に吉里吉里学園、これから、色々な動きが出てくると思うのですが、特色のある、吉里吉里にしかない学園作りを、教育長は考えておられて、それを具現化するようにしていきたいと思っています。

夢の森だけではなく、他のところも色々見た上で、総合的に判断して、本当に吉里吉里にあった学校を作っていきたいなと思っています。大槌学園も、もちろん素晴らしい施設ですので、この施設を生かした特色ある学びというのもできていると感じています。大槌も吉里吉里も、それぞれ特色ある、その地域にあった学びを実現することが我々の仕事であると思っていますし、教員の研修が非常に大事ななと思っています。百聞は一見に如かずで、読んだだけではやっぱりイメージ湧きません。見ないとわからない部分もたくさんあると思いますので、もっと研修する機会を作っていきたいなと思っています。更に、リーフレット等を全戸に配布して、皆さんに分かっていただくことも必要ではないか。小中一貫であるとか、ふるさと科であるとかコミュニティ・スクールであるとか、それを導入する時に全戸配布のリーフレット作成をして、ぜひ町民と一緒に、子どもたちを育てる仕組み作りをしていきたいと考えています。

【大萱生教育委員】

最後の、本当に生活アンケートの結果にある通りで、皆さんの努力が本当に数字に表れていてとても安心しましたし、本当に素晴らしい成果がけやき共育でできているなというのを本当に感じました。これ

からも継続して、また、その0から18の卒業した子どもたちにも目を向けてあげて、大槌で暮らせるような、将来をここで生活できるという見通しも見られたなと思っています。

(平野町長)

それでは、有識者の2名の先生方からご質問等いただければと思います。

最初に小池先生、1つお願いいたします。

【小池東京学芸大学名誉教授】

私の専門は特別支援教育ですので、特別支援教育の観点からちょっと話させていただきます。

LD(※1)の定義っていうか、モデルがだいぶ変わってきています。従来は知能と学力の差があるお子さんっていうことで、それが読めるとかね、そういう読み書きがその一定の知能よりも予想されるよりも低っていうお子さんを診断しよう。今の RTIモデル(※2)っていうのは、リスパンスインストラクションっていうんですけども、学習っていうか、指導を重ねていって、そこでうまく乗ってこない場合には少し支援をして、そしてさらに、そこでも乗り切れてない場合には、もう1回、より小集団での指導をしていこうっていう。最後に残った子どもをLDの対象としてっていう、そういうモデルなのです。日本はどちらかというと、両方とも合わせた形のモデルだということが言えます。ドクターも見て、そしてLDのお子さんに対する支援は、別に診断なくても、LDとして対応してくっていうのがモデルでありますけれども。そういう意味では、今日駆け足で見させていただいた大槌学園のことば・学びの教室のそこに相当すると思います。ことば・学びの教室っていうのは、実は日本にはなくて、ことばの教室はありますけれども、学びの教室っていうのは、LD通級です。LD通級がこの地域にはないので、専門性っていうかLDの支援の専門性を持った先生が樺引先生のみで、彼の今日、スケジュール見させてもらったら、ほとんど埋まっている状態でした。より話を聞くと、いつこう、なんていうかな、教室から卒業させるかっていうことを一生懸命考えながらやっているっていうことは、具体的に言うと、従来の授業からうまく対応できないお子さんに対する対応っていうのが、結構、ぎっくばらんと言うと厳しい状況かなっていうか、1人の先生で結構大変だろうなっていうのが第一印象でした。そういう意味で、ことばと学びの教室に来ている方というのは、就学支援委員会を通っていますので、そこで判断されてきている方っていうのは、やっぱり背景があることが予想されますので、その子どもたちに対する支援を、こうもう少しうまくやっていると、実は、そういう子どもも含めての、けやき共育なので、全体もうまく回っていくのかなっていう印象。なかなか専門って難しい立場で、現状でオーケーっていうこと言ってしまうと、分析になってかないので、私の経験の中で、うまく作動してないところだよっていうところしか言えないので、そこが1つです。あとは、研修会の内容が、特別支援学校の先生をお呼びしていて、特別支援学校の先生は、行動に対する支援なのです。で、何言ったかっていうと、LDの支援っていうのは、もう少し認知の支援なので、どう手掛かりを与えるとかかですね。子どもが処理できる課題を与えながら、だんだん増やしていく。例えば、音読が苦手と言ってもね、2文字みたいな短い単語なら読めるけど、2文字が読めるけども4文字が読めないお子さんからね、2文字も4文字も読めないお子さんってね、いろんなレベルがあって、それをやっぱり配慮していかなくちゃいけない。そういう学習支援についての研修が少し足りないかな。私は今日、短時間

でしたけど見させていただいて、その2点かなと思いました。高校でね、個別最適な学びやっていて、一生懸命されていて、そこはすごいなと思ってちょっとびっくりしたとこでありますか。

LD(※1)・・・学習障害(LD)とは、知的発達の遅れがないものの、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算・推論する」能力のうち、1つ以上の習得・活用に困難を示す発達障害のことで、LD(Learning・Disorder)と略されることもあります。

RTIモデル(※2)・・・RTI(=Response To Intervention)モデルは、学習上のつまずきが見られる子どもに対して、徐々に指導・支援を行ってその反応を測ることにより、どのような支援が必要なか(もしくは必要ではないのか)を客観的に判断していく診断モデルのことを指しています。

→(吉田学務課長)

ことば・学びの教室は、本当に人が足りないっていうか、もう追いつかない状況です。学園では他にもまだサポートしたい、サポートしてあげたいっていう児童生徒は沢山います。ただ、人員不足であり、岩手県ではLD教室はこれから増やさないという方針ですので、そういった中でやっていかなければならないので厳しいと思いましたので、小池先生に、来ていただいたものです。もう1点、学習支援に対する支援の仕方とLDの方の研修ですが、その充実に向けても、小池先生から、ご指導いただきながらやって行かなければならないなと思っていますし、オンラインでもできるというお話を伺っておりましたので、先生方が非常にやりやすいのではないかと感じています。

(平野町長)

先生、何かございますか。

→(小池名誉教授)

そういう意味では、LDの支援っていうのは、やっぱりリモート学習支援っていう1つの道じゃないかなと思います。というのは、どんなに遠いところでも、学習困難な子どもたちっているわけですよ。そういう人のために、やっぱり1教室開くって難しいので、それをリモート支援で繋いでいくのは大事なことなので。そういう意味では、榎引先生に提案したのですが、少しリモート支援しながらやり方を学んでもらうっていう道もあるよねっていうことで、どういう形かでお手伝いできないかなというように考えていきます。

(平野町長)

先生、ありがとうございます。色々な形で取り組みをされると思いますので、事務局を含めてよろしくご指導の方お願いしたいと思います。はい、ありがとうございます。それでは、瀬川部長、よろしく申し上げます。

【瀬川オンライン事業部長】

私、昨年度も参加させていただいておまして、本当にけやき共育の取り組みの丁寧さはいつも素晴らしいなと思っています。質問ですが、最後の方で不登校児童生徒の推移と支援状況のスライドがあったかと思うのですが、回復傾向の子どもたちと新規で心配な子どもたちが出されていましたが、まず、こ

うやって不登校の子どもたちの現状把握をしっかりしているっていうことに意味があると思っています。それによってというか、そこから初めてどういった施策、支援が必要なのかっていうところをクリティカルに考えていけるものと捉えています。この不登校の子どもたちの中で、今欠席日数が180日以上あるというか、ほとんど接点がなくなってしまう、なくなりつつある子がいるかいないか、いるとしたらどのくらいなのかっていうのをちょっと、もしお分かりになりましたら聞けたらと思ったのですが、いかがでしょうか。

→(照井指導主事)

一切来てない子は、今はいないです。ただ、現時点でちょっと詳しい数字は今ちょっと手元にはないですが。現時点で90日くらいの欠席日数の児童生徒は3名ぐらいいます。ただ、そこに対して何もアプローチしていないわけではなくて、やっぱりこう長期。例えば夏休みにちょっと来てもらったりだとか、こう各学園のところで工夫しながら、こう繋ぎながら、その中でスクールソーシャルワーカーだったり、スクールカウンセラーだったりの関わりもこう持てるのであれば持たせられるようにしていったりだとか、そういうところをこう支援者定例会、先ほども元持の方からも説明がありましたが、そういうところでも話題にしながら進めているところです。

【瀬川オンライン事業部長】

やっぱり接点がかなり薄くなってしまっている子ほど具体的な支援を考えていくべきかと思っています。今のお話を聞くと、やっぱりそういった子どもたちに対して、しっかりと状況を把握して、関わる機会を作る支援を検討されているということなので、すごく一つ安心しました。というのと、やっぱり欠席数が多くなって、学びの機会もどんどん、どんどんこう失われていってしまう子たちに対して、それこそ学びにアクセスしやすい環境を作っていく。家でなかなかそういう状況の子が、一人家で学ぶって難しいとは思いますが、学ぼうとすれば学べる環境を整える時に、そういうところで、学校で活用しているタブレットだったりICTっていうのが意味を持つてくると思いますし、環境を作りつつ、でもただ学べる環境を作っておけばいいというわけではなくて、その上で、さらにアウトリーチだったり、支援の接点を作っていくっていうのは、おそらく必要なのかなという風に思っています。

一方で、この支援がかなり途切れてしまう可能性の高い子と、けやき共育でも掲げていると思いますが、本当に全ての子どもたちに対する支援っていうのも、同時に支援というか、全ての子どもたちを意識した取り組みっていうのもすごく大事なかなと思っています。学校のところで日常的な支援、指導っていうのがありますが、やっぱり今、不登校の子どもたちが増えている。ここで起きているのは、前年度不登校だった子が学校に戻ってくる数よりも、新たに不登校になってしまう子の方が多いということだと思っています。なので、結果的にやっぱり全体としてはどんどん、どんどん増えているというのが今の状況かと思うと、やっぱり不登校をいかに減らしていくかっていうのは、この学校の中でこそできることかなと思っています。それに向けて、先生方に対する研修とかを丁寧に行われているのは、1つ素晴らしいことかなと思うと同時に、ちょっとこれは説明が少し難しいのですが、支援指導のもっと前段階みたいなどころもすごく実は大事なかなと思っています。学校の中で、先生と子どもとの間でどんな言葉が交わされて、どんな関

係が生まれているか。言ってしまうと、本当にその学校の空気とか文化みたいなのところっていうのも、実はすごく大事だと捉えています。ただ、ちょっとこれは具体的に、これをこうすればいいっていうのがなかなかないところなので、この支援の施策として置いていくことが難しいかもしれませんが。昨日、僕、たまたま大槌高校の方にお邪魔して、校長先生ともお話しをしたのですが、学校の中で子どもたちが安心して学べる環境をいかに作れるか。それは例えば探究の学びから生まれてきた探究の学びがこう定着してきたことで、いわゆる先生が生徒を指導するっていうのはちょっと違った関係性がそこで生まれていたり、子どもたちと同じ目線に立って寄り添うような言葉がけが増えていたり、それはもしかしたら数字では測れないかもしれませんが、そういった学校の中で実質的に生まれてくる関係性の変化みたいなものが、子どもたちの安心みたいなところにもすごく繋がってくる部分はあると思います。ぜひ学校の中での子ども同士、それから生徒と先生の関係性を、日常的なものですね、日常的な関係性をいかにいいものにしていくかっていうところも、けやき共育の中で検討していけたらいいのかなと思いました。

→(吉田学務課長)

本当に先生と子どもたちの関係、すごく大事でありまして、先生が教える人、子どもが学ぶ人っていう時代ではなくなっています。先生方は、子どもたちと伴走をしていくと、ファシリテーターの役と私は思っていますが。そういうところを、先生方にも理解していただき、一緒に子どもたちと学校を作っていくと、楽しい学校、子どもが主役のみんなの学校を作っていくことができると思っています。そういった部分でも、昨年度、みんなの学校という映画と一緒に見たりして、先生方にメッセージを発信していますので、先生方が、自分たちがどんな学校を作っていくのかっていうところ、子どもたち一緒になって考えて作っていくことが大事だと思っています。子どもが主役になっているかっていうところが、その指標になると思っていますので、例えば先日の教育未来会議の中で、子どもたちから、町で公園を作るときに自分たちの意見が反映された、すごく嬉しかったっていうのはありました。町でもそういう方針でやっていますし、学校でもそういう方針でやっていただけて、子どもたちが主役な学校、町づくりっていうのをしていけばいいと思っています。

(平野町長)

不登校の関係でちょっと私にも気になるところありまして。こういうことを話しますと、どうしても不登校の子どもたちが増えたり減ったりという部分があって、それに一喜一憂するのがあってですね。増えることによって教育委員会サイドの様々な取り組みが悪いのではないかと。数字だけ見るとそうではなくて、やはり考えなきゃならないのは、どういう子どもたちが出てきても、それにサポートする体制を整えていることがすごく大事なことはないかと思っています。どうしても、年ごとに子どもたちも変わってですね、それがそういう状況があるっていうことは受け止めつつも、それでも安心して学校でしっかりとサポートして、地域でサポートしていくっていう体制が必要だと私は思いますので、その辺をしっかりとしていくことが必要ではないかなと思います。これからも教育委員会の様々な事業っていうのは、議会説明、住民説明をする中では、その視点では、安心して子どもたちを育てられる、預けることができる学校

だとか地域であるというようなところを強調しながら進めていきたいと私は思っております。それでは、時間もありませんが、最後になりますが、文部科学省の帆玉係長、よろしくその辺お願いいたします。

#### 【帆玉地方教育行政係長】

私、文部科学省の中です、総合教育会議だとか教育委員会の制度を担当してるものですので、そういった観点からちょっとコメントと申し上げますか、今日感じたことを申し上げさせていただきます。

そもそも総合教育会議だとか教育大綱だとかってというのは、これ典型的な会議行政、計画行政であり、こういったものは形骸化してしまうと、特段意味もなく、ただただ作業が発生する、本当に面倒くさいものなんですけども、こういった総合教育会議だとか教育大綱がある趣旨としては、まず地域住民の代表であり、教育行政の執行機関である教育委員会の皆様と町の町長、さらに、教育行政を進めるためには財政的な裏付けも必要ですし、あるいはこの昨今の複雑化、多様化した教育行政を進めていくためには福祉的な観点からの協力も必要ということで、そういった様々な立ち位置の方が同じビジョンを共有すること、そしてその共有しているということを対外的に示すということがこの総合教育会議だとか教育大綱の趣旨です。で、その観点です、まさにこう教育大綱をしっかり作っていただいて、かつ、こういった形で会議を開いて進めていただいていることに非常に感謝を申し上げるとともに、多大なる敬意を持っているところです。さらに、皆様素晴らしい取組をしていらっしゃる、教育大綱を策定する際に熟議を行ったりだとか、おそらく日頃から教育委員会と町長部局が連携して、こういう総合教育会議がいわゆるハレの場であるならば、そういう日常的な連携の部分についても十分にさせていただいたりだとか、それによってより良い会議だとか教育大綱を策定していらっしゃるのかなという風に思います。

先ほど申し上げたように、総合教育会議や教育大綱というのは 言わば計画行政などところもあるんですが、そういう既存のシステムを、ぜひ、教育行政のため、地域住民のため、学校のため、何より子どもたちのため、存分に活用いただいて、どんどん様々な方々を巻き込んで進めていただけたらと思っております。そして、地域全体で子どもを育てていただいて、今後の地域を担う人間を育てていくと、そういったところをより進めていただければと思っております。既にもう様々な素晴らしい素敵な取り組みをしていただいている、感謝してるところなんです、引き続きご尽力いただければという風に思います。

#### (平野町長)

最後になりますが、その他に入ります。事務局から何かありますか。

無いようですので、これで、議事を終わりたいと思っておりますが、第3回を2月にありますので、今日の会議を踏まえながら意見等をまとめていければと思っております。

委員の方々、あとは事務局含めて、2月に向けての取りまとめ、そして議会への説明、特に説明部分については十分に理解をいただけるような取り組みをよろしくお願いをいたします。